

遙かなるもの

著者	寺川 俊昭
雑誌名	真実心
号	2
ページ	52-67
発行年	1980-10-15
URL	http://id.nii.ac.jp/1108/00000644/

遥かなるもの

寺 川 俊 昭

今日は、今から十五、六年前になりますが、石森延男という児童文学の先生が、当時は東京女子大の先生をしておられました。お話しになったことで非常に感銘を受けて心に残っているある少女のことをお伝えしたいと思います。その少女はバイオリンを習っていて中学校の一年の時、全国コンクールで一位を取ったそうです。それでその才能を期待する人々が、本格的に音楽の勉強をするよう後押しをしてくれて、中学校卒業後フランスに留学することができ、パリの国立音楽学校で本格的にバイオリンを勉強する機会を得たのだそうです。広瀬という名前の少女ですが、そこでプニエル先生にバイオリンを習うことになった。最初に会った

遙かなるもの

時、先生から「自分の好きな曲を弾いてみなさい」と言われ、一生懸命に弾いたそうです。ところが弾き終わるや、聞いていたブニエル先生は、「あなたはまだ土台ができていませんね。」と言われた。そう言われて少女は納得できなかったようです。三、四歳の頃からちゃんとした先生について基礎をみっちり教えられ、日本のコンクールで一位をとるくらいですから相当に弾きこなせる技術を持っているのに、土台ができていないと言われた。少女は不満そうな顔をしたのでしょう。先生はこう言われた。「あなたは技術は相当にできます。私が言っているのは糸の押さえ方とかの技術のことではありません。土台・基礎ができていないというのは別のことなのです。あなたは遠い日本からこのフランスへ音楽の勉強に来ました。しかしあなたは何のために音楽をするのですか。あなたの人生と音楽を学ぶということはどういう関係があるのですか。そもそもあなたは、ピアノを選ばずバイオリンを選んだのは何故ですか。あなたはそういうことを考えたことがないのでしょ。」と。基礎・土台というのはそういうことで、自分の人生において音楽を、バイオリンを自分の大切な仕事としてやるということが、自分の人生にとってこんなに大切な意味があるのだ、と人生に持っている意味をできる限り掘り下げて考え、自分が納得できるまで考え抜く、ということなのです。反省してみると、小さい時か

らバイオリンを弾く技術はお母さんなり先生なりから教えられ、学んできたけれども、今ブニエル先生が指摘されたようなことは誰も教えてくれなかったし、自分も本気で考えたことがなかった。そういうことに気付いて、自分が生きていくうちにバイオリンを弾くということがどういふかけがえのない意味を持つのか、一生懸命に考えたのです。そして先ずわかったこと、それは書いてある楽譜によって書いてあるとおりの音を出すことはできるけれども、作曲した人がその音で、その曲で何を言おうとしているかを自分で読みとらなければ、音は出ても音楽を奏したことにはならない。生きた演奏となるには、聞く人がそれによって人生にある共感を呼び起こされるようなものでなければならぬということでした。そしてそういう生きた演奏のためには、作曲家が何を表現しようとしているのかを読みとることができるとこちらの人生観がなければならぬとわかったそうです。

それを聞いていて、なるほどと思いました。我々はただ生きているということではなく、生きていけば仕事を持ちます。男の場合は時には家庭を放つてでも打ち込まなくてはならないような仕事もあるでしょうし、女の場合でも社会における仕事、それに殊に家庭を責任をもって営み、子供を育てるという大切な仕事があります。そういう仕事に取り組む場合、その仕事が

遙かなるもの

自分の大切な人生の中にどんな意味をもつのかを考える人でないと、人間としても駄目だという教訓が、今の石森先生の語られたエピソードです。簡単なことですが、生きていて何かをするについて、自分はどういうふうに生きるのか、自分はどういう人生をつくりたいのか、かけがえない、誰も代わってくれない、二度とやり直しのきかない自分の人生を、真面目に考えることは、本当に大切なことなのだとつくづく思うのです。

私はテレビが好きでCMもよく見ます。CMというのは面白いものです。何故かという、何とかしてその品物売り込もうと、頭のいい青年達が痩せる思いでその文句を考えだしているのですから、その苦勞が見えて面白いんです。例えば、お父さんが小学生くらいの息子を鍛えるという場面を映しながら、「腕白でもいい、たくましく育ってほしい。」と言うハムのCMがありますが、なるほど父親というのは息子に対しては駄目なものです。親馬鹿という言葉があります、母親は子供に対しては馬鹿にはなりません。父親の愛情というのは面白いもので、母親はよく勉強ができて頭のいい子になれば、そしていい学校へ行っていい会社へ就職すれば、自分も相当のお付き合いができるというような、極めて実利的な計算をするのですが、男は馬鹿だから、頭のいい子になるよりも腕白である方が、父親にとっては嬉しいのです。

テレビといえば、先日見るとはなしに見ておりました教育放送で、フランスの近代絵画を確立した有名な画家の紹介をしておりました。なかなか面白い番組で、いい教訓を与えられました。その画家の晩年の言葉に「私は絵かきだから目に見えるものは信用しない」というのがあるそうです。普通の者であれば、目に見え、耳に聞けるといふ自分の見聞覚知の経験によって確かめられるものは信頼でき、目に見えないものはあるかわからないから信用できないと考えるわけですが、この画家は目に見えるものなどあてにはならない、目に見えないものこそが信頼できるというわけです。これは素晴らしい言葉だと思いました。今ブニエル先生が、広瀬という少女に対して、音楽を学ぶことがあなたの人生にとってどんな意味があるのかよく考えてくれと言われる時、この「人生の意味を考える」ということは目に見えない、どこにあるかわからないことですけれども、非常に大切なことなんです。

私は二年間の女子大勤務の後、十四年ほど前に今の大谷大学に呼ばれまして勤めるようになったのですが、その頃から大谷大学にも女子学生が増えてきて、私が勤めて二年目に女子学生のための寮を設けることになりました。「自らを灯とせよ」というお釈迦様の教えからその寮を私が自灯寮と名づけて寮監になりました。私には女子大勤めの経験があるものですから、寮

遙かなるもの

監に据えられてしまったわけなのですが、実のところ困ったなあと思いました。私にはもともと女性恐怖症がありまして、それが一度に若い女性二十三人もと一緒に暮らすことになったものですから、それは大変でした。男というものは鼻の下が長いものですから、私が女子寮の寮監をやっていると知ってうらやましがる人もいましたが、本人にとってはそれどころではない。とうとう五年目には女性恐怖症が生理的な表現をとるようになりまして、くたびれ果てて寮監をやめさせていただきました。

ところでその最初の年の冬に、夢にも思わなかったことですが、寮生が一人死にました。来年の二月で十三回忌になりますが、あの亡くなっていく時の出来事を見聞きしまして、非常に心に残っておることがあります。その人は北陸のある田舎町のお寺の一人娘さんでした。入寮して間なしの四月の終わり頃、寮生と一緒に哲学の小道にハイキングに行きました。我々の前を若い男の人と女の人が手をつないで楽しそうに歩いていました。その亡くなった娘さんは、私の顔をチラッと見て、私も早くあいたいわと言いました。つまり早くお嬢さんを見つけ、短大でありましたから二年間勉強したら、お嬢さんになる人と一緒に帰って、というような夢を描いていたんですね。私は、女というのはこういうことを考えるのかなあと思って、面

白く聞いていました。ところが虫のしらせとでもいいですか、好きな人もできないうちに死んでしまいました。

少し寒くなった頃から彼女は貧血になりました。北陸の人ですから、白いきれいな肌でしたが、それがだんだん青くなりまして、貧血がひどくて元気が出ないといつも眩くようになりました。これは困ったと思ひまして、冬休みにも早く帰らせたのですが、年が明けても依然として顔色は悪いし、元氣もなく、痩せ方もひどくなっている。どうですかと聞いても、どうも少しずつ悪くなつてくると言つて、しょんぼりとしています。そのうちに年度末試験が始まります。初めての年度末試験です。女子学生というものは徹夜で勉強するんですね。寮生みんな徹夜で勉強するから、彼女も一緒に夜を徹して勉強する。そうするうちによけい体が弱りました、とうとう試験を受けている最中に倒れてしまいました。バタツと倒れて口から泡を吹いたものですから、たまげて救急車で病院へ連れて行きましたら、これは癲癇だと言われました。癲癇にしては体の弱り方が早いなあと思ひましたが、すぐにご両親に連絡をしました。お見えになったご両親と相談しまして、とにかく精密検査をしなければならないというので、府立医大で診てもらいました。やはり癲癇だということで、体が随分弱っているから、すぐ入院して

遙かなるもの

治療しなければ治らないと言われました。それでも得心がいけないものですから、今度は京都大学の医学部の附属病院で診てもらいましたが、そこでも同じ診断でした。とりあえず京都市内のある病院の精神科に入院させてしばらくたちましたが、年度末試験を受けるような状態ではないので、留年しても仕様がなから、故郷へ帰ってゆっくり療養させようということになりました。連れて帰られました。その後私も忙しくしております、二月の中旬頃にどんな状態かと思って電話をしてみました。そうしましたらお母さんがオロオロ声でもう駄目ですと言われる。見込みがないんで、もうあと一週間か十日と言われております、ということでしたので、とりあえずその翌日お見舞に出かけました。病院へ行った時お母さんが話されるには、精神科の病院へ入れても一向によくならず、そのうち突然四十度近い熱が出た。そこではじめて、これは病気が違うんじゃないかと言われて内科に移して検査をしたところが、一べんで癲癇でも何でもなくて、長ったらしい病名の血液の病気であることがわかった。血液が駄目になって、それが脳の血管を詰まらせて発作が起きた。しかしそれは治す薬はなく、もっと早く発見されていても手当は輸血くらいしかない。けれどもここまで弱っておれば処置なしだ、とこういうことです。ご両親も驚き慌てられたけれどもどうにもならない。せつかく尋ねてきた私

にも会ってやってほしいと思うけれども、親としては会ってほしくない、こう言われました。それでも他人でもないのだから一回お会いしましょうと言って、室に入れてもらいましたが、気の毒なものでありました。有体にいえば、室が随分臭いんです。おしめをしてあります。意識がありません。すっかり痩せてしまった彼女が、目をきょんとして、斜めの方を向いてうわ言を言っているのです。本当に哀れな、涙の出るような姿です。そこで、仕様がなから手を握って一言言いましたら、言葉が聞こえたのか、手を握った感覚でわかったのか、正気に戻りました。よその方を向いていた目が僕の方を見て何か言おうとしているのですが、もう頭が駄目になっているのと、体が弱っているのとで、言葉にならないのです。何か言いたそうな風情でアーアーという声を出しています。手を握り返すだけの力もなくなって、ただダランとしているだけです。二、三分そういう状態が続きましたでしょうか。またきょと意識が駄目になって、よその方を向いてとりとめなくワーワー言っているだけです。ほんの二、三分ではあったけれども、彼女は私が見舞に来たということはわかったのだらうと思います。ただその気持ちを表す方法がもうなかったわけです。

その後ご両親から連絡がありまして、私の訪問の後、一週間目に亡くなったということでした。

遙かなるもの

た。しばらくして彼女の遺品をかたづけにご両親が見えました。その時、お母さんが話していた中に、非常に印象に残る次のようなことがありました。

病室で母と娘が一緒に寝て、寝物語にいろんなことを話しあった。その時娘がこんなことを言った。「お母さん、私は大谷大学へ行ってよかったと思う。」と。どうしてだと聞いたら、実は自分はまだ駄目じゃないかという気がする。もう駄目じゃないかと考えるにつけて、大谷大学へ行ってよかったと思う。何故かというと、自分はお寺の子であるから、子供の頃から親鸞聖人の教えを聞いて育ってきた。よくはわからないけれども、お念仏して浄土に生まれてゆく、改まった言葉で言えば念仏往生という道がある。我々にはいろいろな生き方があるが、その中に念仏して浄土に生まれてゆく道がある、ということを感じている。そんなものかなあと思っていたが、今自分の体が弱ってきて、ひょっとすると駄目なんではないかと感ずるようになってみると、寂しくて寂しくてたまらない。自分の生命が減んでいくような気がするのだが、一体どうしたらいいのだろうか……。必死の思いで確かなものを探し求めている時、念仏して浄土に生まれていくという道があるということが、何か自分を励ましてくれる響きで思いついてきた。同時に大谷大学の真宗入門という講義——親鸞聖人の九十年の長い生涯を、

誕生から亡くなるまでかなり丁寧に勉強する科目ですが——これを聞いて、たまたま自分が家で聞いて覚えていたことを、もっとしっかりとした内容で聞くことができた。子供心に大切なものじゃないかと思っていたことが、大学の講義で確かめられたように思える。加えて、自分がもう死ぬんじゃないかという、やりきれない寂しさの中で、このことが非常に大きな励みになってくるように思えた。だから北陸の田舎から京都へ来て、大谷大学で勉強することができてよかったと思う、と言うのです。

このことは遺品整理をしている時に出てきました日記のノートにも記されておりました。それを読んでおりまして、人生の長さからいえば本当に短い、わずか二十年にも満たない人生を、この人は見事に生きておったということを、つくづく思ったことでした。

念仏往生なんてものはどこかにあるものじゃないんです。ただ自分が南無阿弥陀仏という言葉に、親鸞聖人の教えによって如来の大悲を感じる。わからない人はこの言葉をなんだと思うかもしれないけれども、命衰えていかなければならないどうしようもない思いの中で、この言葉があることがどれほど自分を勇気づけてくれることかということを一生涯命たずねたずねて掴み取ったのです。間もなく亡んでゆく自分が、二十年に満たないこの世を生きてどんな意

遙かなるもの

味があつたんだろうかと問いつづけて、念仏往生という親鸞聖人の言葉に、自分の人生は短かったけれども大切なものであつたし、無駄ではなかったということを掴み取ったわけです。これはもう、素晴らしい一生であると言わなければならぬでしょう。二十年で死ぬ人もあれば、親鸞聖人のように九十年まで生きる人もあります。十八や十九で死ぬとは夢にも思っていないとも、病気になるればそれで終わっていくわけです。正に無常です。無常の生命を生きなればならない我々が、本当に求めているもの、無駄でなかったいい人生を生きたことができたという満足感をどこで掴み取るかについて、いま申した一人の少女は親鸞聖人の念仏往生の教えにそれを見出したわけです。生きるということを考える時、早く世を去ったという点で先輩である一人の少女の見事な生き方を私はいつも思うのです。

亡んでゆこうとする人生の暗い気持ちの中で生きる者にとって、一つの大きな光を感じさせてくれた言葉。それに会っていろいろなことを感じてゆく。目にも見えず耳にも聞こえないことですが、そういうものがないと、生きていること全体がつまらないものだと思うのです。

親鸞という人は、自分の人生を生きるということを非常に大切にしました人です。その長い生涯に苦勞することも随分あつたのですが、親鸞聖人にとっては何かの仕事に失敗するとか、人生

の成功者になれないということはどうでもいいことであつた。ただ自分で自分の人生を問うた時に空しい一生であつたといううみじめな生き方はしたくないというのが、親鸞という人を真面目な求道者にした理由なのです。つまり空しさを超えた確かな人生を求めて生きるという、親鸞聖人の命の中に流れていた一つの願いというものを思い起こします。その願いが実は如来の大悲というものです。

もう一つある学生さんのことをお話して終わりにいたしましょう。大悲というのは如来の慈悲・如来の愛のことを言いますが、この話はその学生さんが如来の大悲と重なりあつて親の愛情に触れた話です。

五、六年前になりますか、私が校庭を歩いておりますと、私のゼミの男の学生がちょっと聞いてほしいことがあると言つて、私を呼び止めました。それで人のいない所へ連れて行きますと、彼は、これは誰にも言うわけにいかないことだから、先生すまないが聞いてくれと言ひ、「私はもっと勉強せにゃならんと思います。」と言ひのです。「そりゃそうだ、もう夏休み前で卒論も書かにゃならんからボヤボヤしとれんぞ。」とこう言ひましたら、「いや、そんなことではないんです。」と言つて次のようなことを話してくれました。

遙かなるもの

自分のところへは家から月々四万円前後の学資を送ってくる。自分はそれを受け取って当たり前だと思っていた。自分の家は東北のお寺で、父親が亡くなっているのに、今は母親がお寺を守って住職の仕事もしている。その中で毎月学資を送ってくれるのだけれども、自分には大学を出たらずぐ故郷へ帰って父親の跡を継いで住職になるという運命がある。ところが父親が元気でいれば学校を卒業しても京都にいてもっと遊べるのに、自分の家にはたまたま父親がいなから、卒業するやしないので故郷に帰らなければならない。だから勉強など放って遊んでやろうと思って今まで遊んできた。遊ぶについては金が必要。月々送ってくれる学資も、たったこれだけかという不満な気持ちで受け取っていた。そこに添えられている母親の手紙も大切なところだけ読んで、あとはお金だけ持って飲みに行くことをやっていた。ところがつい先だって、夏休み前に送ってきた現金封筒を開けてみたら、休暇の帰省費用も含めてお金が余計に入っていた。いくらあるかなあと数えていたら、ふっと母親の顔が浮かんできた。お母さんどうしているだろうなと思った。それから中学や高校へ行っている弟や妹はこの頃何をしてるだろうなと思った。そして自分は長男で家の経済状態もわかるから、これだけの金を月々送ってくれるについてはお母さん随分苦労してるだろうなと思った。それだけのことを思った

ら、いつもはもう少しあればと不満めいた気持ちで数える金が、涙で数えられなくなってしまった。

こう言った彼は、自分は間違っていた、あと半年で卒業だが、勉強しないでは母親に申しわけない、と感じたというんです。この誰にも言えない感動を、彼は私をつかまえて喋っていたのです。女の人は比較的スムーズに個人的な感動を人に言うそうですが、男がそんなことを他人に話すというのは、よっぽど大きな感動を得たに違いないのです。私はその話を聞いていて、彼はいい経験を持ったなあと思いました。つまり、たまたま送られてきた学資を通して、その人は母親の愛情と生まれて初めて出会ったのでしょう。青年時代に母親の愛情と出会った経験を持つことができれば、それは一生消えることのないものです。そしてその人を励ます原動力になるわけです。ただ受け取ったお金を通して、一人の子供である学生が感じただけの、いわば目にも見えず、耳にも聞こえないものが、その人の一生を大きく導いていくわけです。そういうようなものが、気付いてみれば私達のまわりには沢山あるものです。

私はなんのために生きているのか、なにをしようとして生きているのか、人としてこの世を生きるこの意味を精一ばい考えてゆく、そういう機会を大事にしてゆきたいと思います。言

遙かなるもの

薬は足りませんが、私が何年間か生きてきた中でお会いしました人達のことを思い出して、そういう世界に皆さんも心を傾けて下されば、大変有難いことだと思っています。

—五四・一〇・二五—